



ほんじつ ～本日のおすすめの本35～

『きつね』にいみなんきちどうわせんしゅう新美南吉童話選集2より

にいみなんきち きく 新美南吉 作 ポプラ社 (2013年初版)

*この本は9番の書棚にあります。(貸出可能)

今回は、きつねが一匹も出てこないのに「きつね」というタイトルがついた新美南吉のおはなしを紹介しします。

新美南吉といえば、「ごんぎつね」や「手ぶくろを賣いに」「おじいさんのランプ」「でんでんむしのかなしみ」など、とても多くの童話を残しています。

幼少のころ、早くに母を亡くし、親戚の家にあずけられた新美南吉は、生涯その悲しみをかかえて生きていきます。この「きつね」という作品には、どんなことがあっても、たとえ世界中の人が自分の敵になっても、自分を心から愛してくれる「母親」という存在への強い思いがえがかれています。

いつもは仲が良いお友達が、ふとしたことから文六ちゃんに「きつねが憑いている」と思い込みます。俗にいう「狐憑き」とは今では迷信や言いつたえとされていますが、新美南吉が子どものころには信じられていたようで、文六ちゃんは「狐が憑いて、ばけものかもしれない」という恐ろしさに子どもたちが翻弄されていきます。

文六ちゃんは、泣く泣く家に帰りますが、そんな文六ちゃんはお母さんの大きな愛に包まれます。どんなことがあってもお母さんが自分のことを一番大事に思ってくれるという新美南吉の切なる願いが如実にえがかれた作品です。

この「きつね」は新美南吉が死を覚悟した二か月前に書かれた作品で、亡き母を懐かしがる思いがあふれています。



3年生ぐらい
から読めます。

新美南吉は4年生の国語「ごんぎつね」で学習しま

す。今から100年近くも前に書かれた「ごんぎつね」

が、いまだに現代の国語の教科書に載っているのもすごいですね。

ちなみに教科書にのっている「ごんぎつね」は新美

南吉が19歳の時に発表されたといわれています。

